

第54回日本人工臓器学会大会をお世話させていただいて

鳥取大学医学部器官再生外科学

西村 元延

Motomobu NISHIMURA



平成28年11月23日(水, 祝日)～25日(金)の3日間、鳥取県米子市において、「第54回日本人工臓器学会大会」をお世話させていただいた。本大会が鳥取県で開催されるのは初めてのことであり、また中国・四国地方に広げてみても、昭和44年に岡山大学医学部外科の砂田輝武先生が第7回大会を開催されて以来ということ、大変光栄である。

今回の大会のテーマは「未来を開く人工臓器」とした。循環、代謝、組織工学、再生医療と人工臓器学会でカバーする分野の進歩、また重症臓器不全に対する臓器代替医療としての人工臓器や再生医療への社会の期待は大きい。それにもまして、植込み型補助人工心臓の臨床応用の爆発的広がりや心筋細胞シートの世界に先駆けての認可、保険償還など、人工臓器学会をとりまく状況は大きな転換期にある。まさに今後の医療の鍵になるという意味で、「未来を開く人工臓器」である。

大会の企画立案には、プログラム委員にご就任いただいた先生を中心に、広く評議員の先生のお知恵をお借りした。また成功裏に開催された第51回横浜大会、第52回札幌大会、第53回東京大会の企画を大いに参考にさせていただいた。

特別講演1では大阪大学の澤 芳樹先生に「重症心不全治療における補助人工心臓治療の展望 ～BTTからDTかBTRへ～」と題してBTT(bridge to transplant)からDT(destination therapy)、BTR(bridge to recovery)に至るまで、現状と将来展望をわかりやすくご講演いただいた。骨格筋芽細胞を用いた心筋細胞シートが保険適用になったこともあり、その開発者である澤先生に再生治療によるBTR

を目指した治療まで含めて、将来展望をご講演いただいた。また特別講演2では、循環器領域の新しい話題である経カテーテル的大動脈弁植込み術(TAVI, TAVR)の現況について、ロンドン大学のStephen Brecker先生に「Challenges and Future Perspectives of TAVI」と題してご講演いただいた。招請講演としては、実施施設も着実に増加しつつある植込み型補助人工心臓をテーマとし、米国シャープ記念病院のWalter Dembitsky先生とオーストリア ウィーン大学のAndreas Zuckermann先生をお招きしてご講演をいただいた。

今大会では理事長講演を企画し、妙中義之理事長より「医工・産学官連携による人工臓器のイノベーション」と題して今後の本学会のあり方についてご講演いただいた(図1)。さらにこれに関連したシンポジウムとして、医療機器開発迅速化のための環境整備を企画し、活発なご議論をいただいた(図2)。

またシンポジウムやワークショップなどの上級演題として、「人工臓器を用いた在宅医療の安全性と課題」「人工臓器を用いた医療現場でのコメディカルの役割」「ヒヤリハットから学ぶ人工臓器の安全管理」など、循環器系と代謝系に共通するテーマをできるだけ取り上げ、双方の研究者が1つの会場で討論できる場を設けるようにした。

そのほか、学会活性化を目指して企画されている萌芽研究ポスターセッションを今年も設けさせていただき、優秀演題を懇親会で表彰させていただいた(図3)。次世代を担う研究者の励みになれば幸いである。市民公開講座の企画に科学研究費がつき、「ここまで進んだ!! 人工心臓と介護ロボット」と題した市民公開講座を開催した。約80名の医療関係者や一般市民の参加があり、実際の介護ロボットに触れていただいたり、人工心臓装着患者の体験談を聞いていただいた。特に、人工心臓を実際に装着されている患者

■ 著者連絡先

鳥取大学医学部器官再生外科学

(〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1)

E-mail. nishimur@med.tottori-u.ac.jp



図1 理事長講演



図2 シンポジウム4 医療機器開発迅速化のための環境整備



図3 会員懇親会での萌芽研究ポスター表彰式



図4 スタッフの集合写真

さんのお話は、ドライブラインの日々の管理を面倒臭く感じられていたり、「お風呂に浸かりたい」などの本音をお伺いすることができました。生存率が近年、著しく向上している植込み型補助人工心臓であるが、それに満足することなく、このような声に応じて地道な機器の改良を続けていくことが重要である、と痛感させられた。

有料参加者数832名、招待者数79名、企業関係者や病院関係者など合計すると参加者総数は911名となり、交通のアクセスが悪い鳥取県米子市での開催ということで参加人数が少なくなることを危惧していたのがウソのような大盛況の大会となった。皆様のご協力のおかげで、成功裏に大

会を終えることができ、次回大会へつなぐことができた。紙面を借りて厚く御礼を申し上げたいと思う(図4)。

最後になるが、今回の大会にあわせて大山、出雲大社、境港などへの観光を楽しまれた方、さらには海の幸、山の幸など秋の味覚を堪能された方も多かったのではないだろうか。大会のアカデミックな雰囲気とともに秋の山陰を楽しんでいただけたなら、大会主催者としては望外の喜びである。

本稿の著者には規定されたCOIはない。